

私たち、今これに夢中です

私たちのまち、北区には二十六万人以上が暮らしています。その中には、趣味を楽しんだり、新しいことに挑戦したりする人たちがたくさんいます。文化活動やスポーツなど、その活動分野はさまざま。しかし、皆さんに共通しているのは、充実した毎日を送り、表情が輝いていること。今月は、それぞれの分野で生き生きと活動している二人を紹介します。



笑いはたくさんあったほうがいい

やすきおし
安来節*

さとうぎこう
佐藤義光さん

野 良着姿に豆絞りの手ぬぐいをかぶり、田んぼの中のだじょうををさるですくう様子をユーモラスに表した安来節のだじょうすくい踊り。そんな安来節に魅せられたのが新琴似にお住まいの佐藤義光さんです。

「老後でも何か楽しめるものがないだろうか。歌うことは苦手だけど、踊りであればできるのではないか」。そんな気持ちで佐藤さんは安来節を始めたそうです。一人で練習に励んだ結果、昭和六十二年に安来節発祥の地である島根県の安来節保存会から「正調踊り手」として認定されました。平成九年には同好会を設立。手書きのイラストが入った解説書を作り、

安来節の普及に努めています。

また、自分の踊りで何か人の役に立つことができたらと、老人福祉施設や小学校などでボランティア活動も行っています。安来節の一つ、竹筒の形をした太鼓を使う銭太鼓踊りでは、観客も一緒になって踊るとか。「ただ踊りを見てもらうだけではなく、実際に手

足を動かして一緒に踊ってもらうことで、ますます楽しんでいっばい笑ってもらえるんです」と佐藤さんは話します。

「『楽しかったよ』と言われることが本当にうれしい」と、佐藤さんには笑顔が絶えません。これからも仲間と共に安来節を普及させて、笑いの輪を広げたい。佐藤さんの夢はどんどん膨らんでいきます。

「老後でも何か楽しめるものがないだろうか。歌うことは苦手ではないか」。そんな気持ちで佐藤さんは安来節を始めたそうです。一人で練習に励んだ結果、昭和六十二年に安来節発祥の地である島根県の安来節保存会から「正調踊り手」として認定されました。平成九年には同好会を設立。手書きのイラストが入った解説書を作り、



▲佐藤さんの指導の下、小学生たちも踊りや大道芸に挑戦します

自 分たちの住むまちの歴史を地域の人たちに伝えていっているのが、篠路に住んでいる羽田信三さんです。「新しい事実を見つけたら、関係ないと思っていたほかの市町村の話が篠路にもかかわっていたり。調べていくといろいろ面白い発見があるので、歴史は面白いんです